



子ども新聞記者
@大阪マラソン

子ども 夢・創造 プロジェクト

2018年度
前期
プログラム
活動報告

「子ども 夢・創造プロジェクト」は、さまざまな分野の「プロフェッショナル」を講師に迎え、小・中学生のあこがれの分野や技術、作品づくりなどを本格的に体験できるプログラムです。
プロフェッショナルの世界を実際に体験する貴重なチャンス!
「おもしろそう!」「やりたい!」その気持ちがあればOK!
自分の新たな才能に気づくかも!?

協力 **読売新聞**

「子ども 夢・創造プロジェクト」は大阪市と民間企業・団体の協働により実施しています。

実行委員会(2018年度) 実行委員長 今西幸蔵(桃山学院教育大学教育学部客員教授)



協力団体(2018年度・順不同)

一般社団法人分析研修センター/株式会社海遊館/(株)ワオ・コーポレーション WAO!LAB/(株)エンジズ キッズプロジェクト/6(rock)woodworks & life/オスモ&エーデル株式会社/Natural Backyard/ECCアーティスト美容専門学校/重山建築研究室/大阪芸術大学附属大阪美術専門学校/清風情報工科学院/大阪バイオメディカル専門学校/NPO法人書道スーパーキッズの会/(株)スペルバウンド/(株)アカルプロジェクト/(株)よしもとクリエイティブ・エージェンシー/アナ・トーク学院/読売新聞大阪本社/大阪マラソン組織委員会/大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学/エール学園/大阪市子ども青少年局

小学生新聞で発行部数No.1 /

子どもの?が輝く未来にかわる

毎週木曜日発行
タブロイド判 20ページ オールカラー
月額 550円 (税込み)
読売KODOMO新聞

中学生・高校生には /

中高生が知りたい、情報満載!!

毎週金曜日発行
タブロイド判 24ページ オールカラー
月額 850円 (税込み)
読売中高生新聞

お得な割引価格

読売KODOMO新聞 通常月額 550円(税込み) + 読売中高生新聞 通常月額 850円(税込み) = 併読中はずっとお得!
併読価格 月額 1,100円(税込み)
優待価格 最初の6か月間はお得に! 月額 550円(税込み)

お客様の個人情報は、読売新聞社及びお客様の地域を担当する読売センター (YC) が共同で取得・管理し、配達・集金業務の遂行、各種サービス・イベントのお知らせ、ご購入の延長・再開のお勧め、YC 及び読売グループが協力する・提携する企業等の商品・サービスのご案内、宅配業務などに利用させていただきます。

問い合わせ先 **読売新聞社 0120-4343-81**
<https://www.yomifa.com/ssl/yomiuri/otm/>



2018年度 **こども新聞記者** 活動報告

「こども新聞記者」を体験したのは、小学5年から中学2年までの男子3人、女子4人の計7人です。読売新聞が協力し、全参加者が募金に協力するチャリティーマラソンとして行われる「第8回大阪マラソン」取材しました。

大会前日の11月24日には、大会を盛り上げる大阪マラソンアンバサダーの一人で、長

野五輪女子スピードスケート500メートル銅メダリストの岡崎朋美さん取材しました。約3万2000人のランナーの受け付け業務を支えるボランティアにも話を聞きました。

大会当日の同25日には、車いすマラソン優勝者の西田宗城さんと、日本勢で男女トップの五十嵐真悟さん、山口遥さん取材。アンバサダーで元プロ野球阪神タイガースの赤星憲広さんや、京都大学IPS細胞研究所所長の山中伸弥さん、市民ランナーの皆さんにも話をうかがいました。

取材に応じて下さった方々をはじめ、運営面でご協力をいただいた大阪マラソン組織委員会事務局の皆さん、本当にありがとうございました。(文中の肩書き、年齢は取材当時のものです)



ゴール付近で取材するこども記者たち

【中学2年】

【小学6年】

【小学5年】



たかはしゆめ
高橋 夢 記者



かとうりみ
加藤 理実 記者



なかがわたくし
中川 崇 記者



すぎのはるか
杉野 遙 記者



きたほのか
喜多 ほか 記者



なかやまあきと
中山 朝登 記者



わたなべこうたろう
渡邊 皓太郎 記者

活動報告

1

車いすマラソン優勝 西田 宗城さん

車いすマラソン男子に出場した西田宗城さん(34)(大阪府和泉市)は、スタート直後の駆け引きを制し、大阪マラソンでは3度目の勝利をつかみました。こども記者たちは、西田さんの強さの秘密や、車いすマラソンの魅力について聞きました。



中山記者撮影

「優勝を確信した瞬間はいつですか」と西田さんに聞くと、「最後のゴールテープが見えた時」と言われ、驚きました。車いすは、タイヤがでこぼこにはまったり、パンクしたりして進めなくなることがあるので、最後の最後まで気が抜けないそうです。

【加藤理実記者】

西田さんは、「優勝はうれしいけれど、自己ベスト(1時間20分28秒)を更新できなかったのは悔しい」と話していました。車いすマラソンを始めたのは22歳頃。「テレビで車いすマラソンを見て、ひとめぼれした」ことがきっかけだそうです。

【渡邊皓太郎記者】

「車いすマラソンが好き」

大学生の時、交通事故でせきずいを損傷した西田さん。「もし再生医療が進歩して、僕の脚(あし)を治せるようになって、治さずに続けたい。それくらい、車いすマラソンが好き」なのだとか。西田さんの強さは、心の強さと競技への愛情が支えていると感じました。

【高橋夢記者】



ゴール直後の西田さん 喜多記者撮影

「名前を呼んで応援してくれる」

五十嵐さんは、ボストンマラソンや東京マラソンなど国内外の大会に計22回出場したそうです。大阪マラソンの良いところについて、「沿道の人がランナーの名前を呼んで応援してくれるので、勇気づけられた」と話していました。【中川崇記者】



渡邊記者撮影

マラソンの楽しさを尋ねると、五十嵐さんは少し考えて、「走っている時はきつい、苦しいという感覚しかないが、走り終わった後、その苦しさに勝った自分に達成感が生まれる」、山口さんは「友達が増え、横のつながりが広がった」と2人とも笑顔を見せました。【喜多ほか記者】

活動報告

2

日本人ランナー 男女トップ 五十嵐 真悟さん、山口 遥さん

こども記者たちは、日本人ランナーで男女トップの五十嵐真悟さん(32)(城西大クラブ)と山口遥さん(31)(AC・KITA)に話を聞きました。五十嵐さんは1位のケニア人選手と最後まで一騎打ちを演じ、8秒差の2位でゴール。山口さんも女性で2位と健闘しました。

「友達が増え、つながりが広がった」



渡邊記者撮影

山中教授に インタビュー

大阪マラソンには、京都大学iPS細胞研究所所長の山中伸弥教授も出場。3時間31分40秒かけて完走しました。直後の記者会見では、大人の新聞記者に交ざって、こども記者たちが、堂々と山中教授に質問しました。



中山記者撮影

一問一答

Q マラソン中は、何を考えて走っていましたか。

【中山朝登記者】

A 最初は、(大阪万博の誘致特使を務めていたので)大阪万博の開催が決まってよかったなあと思って走っていました。でも、途中から、暑くなってきて、暑いなあ〜、早く終わらないかな〜と思って走っていました。沿道の人に「山中〜がんばれ」と声をかけてもらい、なんとか頑張ることができました。

Q これから未来を背負っていく僕たちにアドバイスはありますか。

【中川崇記者】

A 勉強はもちろん大切だけど、君たちが今やっている、こども記者の取り組みのように、いろいろな経験を重ねることが大切です。失敗してもいいから、色んなことに挑戦してほしい。失敗を重ねることで、成功につながっていく。



「暑いなあ〜」と気さくな一面を見せたかと思えば、まじめな一面も見せる。山中教授は、様々な組織に変化していくiPS細胞のような人だと思いました。

【高橋夢記者】

マラソンを走った後でつかれているのに、やさしく答えてくれたので、うれしかったです。アドバイスをこれからの人生に役立てていきたいです。

【中川崇記者】

僕たちの質問に丁寧に答えてくれて、とてもやさしい人だと思いました。

【中山朝登記者】

活動報告

3

メディカルランナー 大阪市消防局の救急救命士

大阪マラソンでは、レース中のランナーの急病やけがに備えて、医師と看護師、救急救命士約100人がメディカルランナーとして登録。42.195キロを一般ランナーと一緒に走りながら、周囲に気を配っています。今大会では、中高年の男性ランナーが倒れ、心肺停止状態になりましたが、メディカルランナーらがAED(自動体外式除細動器)などの初期対応を行ったおかげで、約10分後に意識を取り戻すことができました。

「幅広い年齢層のランナーが安心して、安全に走ってほしい」



こども記者たちは、メディカルランナーを務めた(右から)大阪市消防局の救急救命士、田中宏幸さん(60)(平野消防署)、土岐悟さん(43)(淀川消防署)、浜川なおきさん(32)(大阪市消防局救急課)の3人に話を聞きました。

今回でメディカルランナーは8回目の土岐さんは、「普段の仕事では見えないものが見えて自分が成長できる」と言います。初参加の浜川さんは「幅広い年齢層のランナーが安心して、安全に走ってほしい」と志願しました。田中さんは5回目。定年を迎え、もうメディカルランナーとしては走れませんが、「これからも市民ランナーとして走りたい。そして、もし、目の前でランナーが倒れたら、レースを投げ出して助ける」そうです。

【渡邊皓太郎記者】

消防局に38年間務めた田中さんでも、心肺停止状態の人をAEDで助けた経験は、数えるほどしかないそうです。「メディカルランナーとしての最後の大会で、心肺停止状態のランナーを助けたことに、運命を感じた。意識が戻った時は、うれしかった」。そう話す田中さんの姿に、救急救命士の熱い思いが大阪マラソンを支えていると感じました。

【高橋夢記者】

救急救命士の仕事について、土岐さんは「救助した方が回復してお礼の手紙をもらう時が一番うれしい」そうです。田中さんは、大阪市で初めて救急救命士になった職員の一人です。土岐さん、浜川さんにとって「師匠のような存在」です。3人とも「救急隊員はやりがいのある仕事」と話していて、私は聞いているうちに胸が熱くなりました。

【杉野遙記者】

Osaka Marathon Ambassador

大阪マラソンアンバサダー

大阪マラソンでは、大阪マラソンアンバサダー(大使)と呼ばれる著名人が、それぞれの得意分野を生かして大会を盛り上げるための活動をしています。こども記者たちは、9人のアンバサダーのうち、野球とスピードスケートの分野でそれぞれ名をはせた赤星憲広さん、岡崎朋美さんのお二人に、現役時代の思い出などを聞きました。



活動報告

4

大阪マラソンアンバサダー

あか ほし のり ひろ
赤星 憲広さん



赤星憲広さんのプロフィール

1976年愛知県出身。2001年阪神タイガース入団。1年目に盗塁王と新人王を獲得。セ・リーグ記録となる5年連続盗塁王に輝き、ベストナイン2回、ゴールデン・グラブ賞6度受賞。2009年試合中のダイビングキャッチでせきずいを損傷し、現役引退。現在は野球解説者として活躍。

赤星さんの背番号「53」の意味をたずねました。背番号を決めるとき、シドニー五輪などで思い入れのある「26」と「9」が空いていたので、「どちらでもいい」と阪神球団に伝えたら、なぜか「53」をもらったそうです。「『53』は、<ゴミ>や<誤算>とも読めるからショックだった。でも、ファンの皆さんに背番号を覚えてもらいたいと思って、逆に火が付きましたね」と話していました。

【加藤理実記者】

テレビに出演する前に、準備していることを聞きました。赤星さんは「勉強しています。プロ野球選手時代は、政治のこともよくわからなかったけれど、引退後はニュースを見たり、新聞を読んだりするようになりました」と教えてくれました。そのおかげで、テレビの共演者から難しいことを聞かれても、切り返せるようになったそうです。

【中川崇記者】

「負けた時のショックがあったから努力できた」

阪神入団が決まった当初、赤星さんは、「背が小さい」「球が飛ばない」と言われました。赤星さんは「最初は不安だったけれど、背が小さくてもプロ野球選手としてやっていけるところを見せて、人に希望を持たせたい。大きい人にも負けないぞ」とがんばったそうです。赤星さんがみんなに好かれる選手になった理由が分かりました。

【喜多ほのか記者】

赤星さんは足が速いことで有名です。でも、中学生の時にリレーのアンカーを務め、3人に抜かれたことがあるそうです。「その時のショックがあったから、努力してもっと足が速くなった」と教えてくれました。どの分野にも上には上がいるということと、負けても、あきらめずに努力することの大切さを感じました。

【中山朝登記者】



「辛くても苦しくても強くなり続ける」

東京マラソンと比べた大阪マラソンの魅力は何でしょう。岡崎さんは、沿道の応援がすごいと言います。「応援する人も、がんばって走っているランナーの姿を見て、自分も色々なことにチャレンジしようと思えるのだと思う。そして、走っている人と応援している人の一体感も、大阪マラソンならではのものだ」と話してくれました。

【渡邊皓太郎記者】

42.195キロ。果てしなく長く感じる距離だ。私だったらリタイアしてしまうだろう。そんな私には、越えられない壁も、強くなって超えていくと語る岡崎さんが、かっこよく見えた。岡崎さんは、筋肉が練習の痛みを経て太く、強くなることを例に挙げ、痛いからといって終わらせてはいけないと話した。辛くても、苦しくても走り続けるランナーたちは、強くなり続けているのだろう。だから、あんなにも輝いて見えるのだ。

【高橋夢記者】

長野五輪では緊張していたに違いない。そう思ったはずねと、「大会の空気は張りつめていたけれど、緊張はしなかった。どちらかという、ワクワクしていた」との答えが返ってきました。オリンピックなのに緊張しないなんて、すごいと思いました。

【杉野遙記者】

大阪マラソンアンバサダー おが さき とも み 岡崎 朋美さん



岡崎朋美さんのプロフィール

5度の冬季オリンピックに出場。1998年長野五輪ではスピードスケート女子500メートルで日本女子短距離初の表彰台となる銅メダルを獲得。2006年のトリノ五輪では日本選手団主将、10年バンクーバー五輪では日本選手団旗手を務め、13年に現役を引退。現在はタレントとして活躍。



Citizen Runner

市民ランナー

第8回大会では、約3万2000人のランナーが大阪の街を駆け抜けました。こども記者たちは、フルマラソンのゴールとなるインテックス大阪で、完走したばかりの皆さんから、喜びの声を聞きました。

活動報告

5



大澤香織さん(26)(東京都大田区)は初めての大阪マラソンを、たこ焼きの仮装をして走りました。目標の4時間10分台には届かなかったけれど、「最後の南港大橋を笑顔で走りきるとい目標を達成できて良かった」と話していました。

【中山朝登記者】



◎中川記者撮影

戦国武将、伊達政宗にふんじた吉田昌弘さん(61)(兵庫県高砂市)は、「WE♡BOB(ウィ・ラブ・بوب)」と書いた紙をゼッケンに貼っていました。「BOB」は、大会直前の10月に亡くなった友人のハンドルネームなのだそう。「第6回大会は友人と一緒に参加しました。きょうは友人のことを思いながら走りました」と話し、少し涙ぐんでいました。

【渡邊皓太郎記者】



◎喜多記者撮影

「バットマダム」のコスプレで完走した霜倉里香さん(53)(兵庫県伊丹市)は3回目の大阪マラソンとのことで、「5時間を切ることが出来た。これまで一番早いタイムだった」とうれしそうでした。

【杉野遙記者】



◎加藤記者撮影

フルマラソン歴10回以上という庭田裕仁さん(47)(神奈川県座間市)は、東京マラソンにも5回出場したベテランランナー。でも、大阪マラソンは初めてのことで、「なにわの応援がすごかった」と驚いていました。大阪では沿道の人がランナーをいじるらしく、「それをうまく切り返せるのがすごい」と。さすがはお笑いの街、大阪です。

【高橋夢記者】

Volunteer

ボランティア

大阪マラソンは、約1万人のボランティアが運営を支えています。こども記者たちは、大会前日、インテックス大阪でランナーの受け付けに当たるボランティアを取材。大阪マラソン組織委員会副会長の竹内章さんにも話を聞きました。

活動報告

6

受付ボランティアのリーダー
田部 瑞貴さん



◎杉野記者撮影

笑顔でランナーに参加賞を渡していた田部瑞貴さん(19)は「25日はランナーに荷物を返す仕事をします。とても責任重大なので、気を引き締めつつ、笑顔と声かけを心がけてがんばりたい」と話してくれました。そんな田部さんはとても輝いて見え、私も将来、やってみたいと思いました。

【喜多ほのか記者】

大阪マラソン組織委員会副会長
(大阪陸上競技協会専務理事)

竹内 章さん



竹内さんは「ランナーが大阪の街で飲食や宿泊してお金を使ってくれるので、毎年約150億円の経済効果がある」と教えてくれた。大会は8回目なので通算1200億円も使われた計算になる。そんな効果がある大阪マラソンはすごいな、と思った。

【加藤理実記者】

大阪マラソンのコースが次回から変更されると聞きました。理由の一つが「ゴール近くの南港大橋が上り坂で、車いすマラソンの参加者が渡りにくいから」だそうです。

【杉野遙記者】

受付ボランティアのリーダー
植松 隆哉さん

植松隆哉さん(24)は、ランナーにウェアや帽子などのグッズを渡していました。やりがいを感じるのは、「ありがとう」と言われた瞬間だそうです。今回、誘われて初めてボランティアをした植松さんですが、次回は、自分が誰かを誘いたいと思ったそうです。誘われた人が、誰かを誘う。このようにして大阪マラソンが成り立っているのだと思いました。皆さんも、大阪マラソンや大阪万博でボランティアをやってみませんか？

【中川崇記者】



◎高橋記者撮影

無給で交通費も出ないのに、なぜこんなに多くの人がボランティアをするのだろう。この疑問をぶつけてみた。竹内さんは、「色々な理由はあると思うが、(ボランティアを希望する人には)『走ることが好き』という大前提はある」と答えてくれた。

【高橋夢記者】



竹内さん(左)に取材するこども記者たち